

社会思想史学会第 49 回大会 セッション I 「政治学者が読むグレーバー」

世話人・司会・討論者：重田園江（明治大学）、網谷壮介（獨協大学）

報告者：宇野重規（東京大学）、野口雅弘（成蹊大学）、上村剛（関西学院大学）

参加者：約 30 人

事後報告

デイヴィッド・グレーバーは人類学に新たな息吹を吹き込んだだけでなく、新しいアナキズムの構想や新しい社会運動の実践、さらに民主主義論まで提唱するスケールの大きい思想家だった。本セッションでは、従来こうしたグレーバーの仕事に関心を向けてこなかった政治学者にとってグレーバーがどう読めるのかをテーマとした。

最初に宇野会員の報告では、『万物の黎明』（デイヴィッド・ウエングロウとの共著）に焦点が当てられ、その人類史の政治学的含意が論じられた。『民主主義の非西洋的起源について』では民主主義の西洋中心主義的理解を批判しようとするあまり、イロコイ族や海賊の実践など学術的に問題含みの点が多かった。しかし『万物の黎明』では人類史全体に視野が広がり、国家は普遍的なものではなく、とりわけ西洋的近代国家は人類史のなかで極めて特殊なものにすぎないという主張に力点が置かれる。クラストルの議論を出発点に、グレーバーは政治を国家と同一視することはできず、むしろ人々による社会組織の実験、すなわち自己創造の実践として理解すべきことを提唱する。宇野会員は——アナキズムと民主主義を同一視する議論は受け容れがたいとしても——、政治的体制への構想力を回復させるために、国家登場以前の人類の多様な政治的実験を再考する必要性を示唆するとして、グレーバーの重要性を結論づけた。

次に上村会員は、『万物の黎明』に西洋政治思想史への根源的批判を見て取ることが重要だとする報告を行った。実際、西洋政治思想史には暴力性が伴う。例えば、南北アメリカへの白人の進出によって単に先住民が滅ぼされただけでなく、その歴史もまた滅ぼされた。近年、先住民の歴史はその主体性も含めて再評価されているが、依然として白人中心的である。さらに西洋政治思想史には、起源の設定とそこからのナラティブの構築という直線的な時間感覚が内包されている。そのもとにホップズやルソーなどの思想家が偉人列伝のように配され、それ以外の非西洋圏の歴史や思想は軽視される傾向がある。タイトルにある「万物の黎明」には、こうした直線的な時間感覚への批判が見られる。上村会員によれば、エリアーデによるこの言葉は「はじまりをもたない」神話的な時間を指し示しており、グレーバーはそれを通じて西洋政治思想史の直線的な時間感覚によって排除されてしまった歴史の回復を企てている。

最後に野口会員は、ウェーバー、ハイエクと比較することでグレーバーの官僚制論を特徴づけた。ウェーバーが官僚制を恣意性の排除によって特徴づけたのに対し、ハイエクは集産主義や設計主義においては計画を立てる少数のエリート官僚の恣意性が顕著になるとし、

そこに市場の競争原理と自生的秩序を対置した。これに対しグレーバーは、市場原理に基づく改革が逆にもう一段階上位の恣意性を生み出し、合法性を超越した権力を強化すると批判する。透明性や説明責任の追求によってではこうした状況は打破できず、むしろ逆効果になってしまうと考えるグレーバーは、イロコイ文化やコミュニズム、アナキズムに別の可能性を探ろうとしたのである。ただし野口会員によれば、ウェーバーとグレーバーは正反対の立場にありながらも、学問の多様性と可能性を認める点で共通しており、政治学がバイアスを排除するほど不健全になるという問題意識において両者をつなぐことができる。

討論者である重田・網谷会員からは宇野会員に向けて、グレーバーの言うアナキズム的な社会実験・民主主義の実践と既存の議会制民主主義の関係について質問がなされた。これに対し、グレーバーには後者を乗り越える意図が明確だが、近年「民主主義の実験」を強調してきた宇野会員自身は二つのスタンスで揺れているところがあると応答があった。一方で議会制の外部に民主主義の可能性を見出すことも重要だが、他方で行き詰まった議会制を内在的に活性させていくという議論ももつとなされてもよいのではないかというのである。

また網谷会員から上村会員に対して、グレーバーの人類学が西洋政治思想史に対する根本的な批判となっているとして、それでは思想史研究者は人類学や考古学に対してどのようにアプローチするべきかという質問がなされた。上村会員は、テキストを文字資料のみに還元して捉えるのは狭い理解であって、無文字社会においても「テキスト」を同定する事が可能であるとし、グレーバーとウエングロウのように人類学者や考古学者と協働しながら新たな思想史を発掘していくことは生産的だと応答した。

さらに重田会員からは、フーコーの統治されない自由の議論と市場原理と官僚制の結合を批判するグレーバーの視座には親和的な部分があると指摘があったうえで、野口会員に対して、彼らの問題提起を受けてその先をどう構想していくべきかという質問がなされた。野口会員からは、すべてが統治の対象となるという余白のなさは経済の問題と密接に関連しており、それを政治学者は十分には扱えていないが、他方でグレーバーのオルタナティブな構想はスケールアップした社会においても現実の行政の政策論に落とし込める可能性があるとする応答がなされた。

その他、フロアからもケア労働や少数者の抑圧の問題など、活発な質疑応答がなされた。